川上 高司 ブログ アーカイヴ

2015年

1月2日

「古い戦争」の終了と「新たな戦争」の始まり

ブッシュ大統領時代に始まった「テロとの戦争」がようやく終結した。2014 年 12 月 31 日をもって、アフガニスタンでの米軍の軍事行動が終了した。それに伴い ISAF の活動も終了し、アフガニスタンの治安維持はすべてアフガニスタン軍が担うこととなった。

だが、アフガニスタンにとってはこれからが再建の厳しい道が待ち受けているのである。それを象徴するかのように、1 月 1 日、結婚式が予定されていたヘルマンド州の民家にロケット弾が打ち込まれた。新婦の到着を待つ親戚や近所の人々が集まっていた民家に着弾したロケット弾は少なくとも 28 人の命を奪った。負傷者の数はもっと多い。しかし問題は犠牲者の数ではなく、そのほとんどが女性やこどもだったこと、打ち込んだのがアフガニスタン軍であったことだ。

ヘルマンド州はけしの栽培が盛んでタリバンにとっては重要な資金源となっている。米軍の撤退が進むにつれてタリバンと政府側との衝突は増えつつあった。これからはそのすべてをアフガニスタンの国民自らが背負っていかなくてはならない。アフガニスタンの大統領は国民に対して自国軍への支持と支援を求めたが、軍が国民の信頼を得るには長い時間がかかりそうである。そしてそれはまさにアフガニスタンの再建の道の険しさを物語っている。国際社会はアフガニスタンへの支援を怠ってはいけない。

10 年を超えるアフガニスタンへの介入の終了はアメリカにとっては朗報に違いない。一方でシリア内戦で台頭した ISIS はイラクでも勢力を強め、そう簡単には消滅しない。アメリカはその ISIS と闘う新たな戦争へとはじめの一歩を踏み出しつつある。ISIS 対策のオバマ大統領のジョン・アレン特使は「数十年かかるだろう」と覚悟を決めている。アレンは、アフガニスタンでも駐留部隊の副司令官を務めたベテランである。

新たな戦争を始めるのはたやすい。だが戦闘は終わっても国の再建にはさらに時間がかかることは古い戦争でアメリカは学んだはずである。古い戦争の終わりと新たな戦争の始まりに立って 2015 年を迎えたオバマ大統領は、残りの 2 年の任期を戦争で費やすのか否か。その分かれ道に立っている。

1月26日

残り2年のオバマ政権の行方

オバマ政権はイラクへ第８２空挺部隊から 1000 人をイラクへ派遣する予定である。主な任務は「イラク軍の養成」であるとされている。すでに 250 人がイラクに派

兵されているのでオバマ政権は「増派」したのである。

この 1000 人は、実は昨年 12 月にオバマ大統領が 1500 人をイラクへ派遣すると発表したその一部である。ＩＳＩＳはイラクやシリアで勢力を強め、カナダ軍とは実際に衝突している。こうして少しずつ米軍の派兵が増えていけばやがてＩＳＩＳと米軍が衝突する可能性は高まり、そうなれば米軍が再び泥沼の戦争へと足をとられていくことは容易に予測できる。

2001 年以降、主にイラクとアフガニスタンで使われた予算は総額で 1.7 兆ドルとなった。支出が突出したのは 2008 年でそれ以降は段階的に減少傾向にある。全体は減少したにもかかわらず急激に伸びているのが、帰還兵に関わる支出である。退役軍人局ではイラク、アフガニスタンでの退役軍人に関する支出は 2007 年から発生し、当初は 10 億ドルだったのが 2014 年には 40 億ドルにはねあがっている。

昨年 12 月 31 日をもってアフガニスタンでの米軍の任務か完了した。国防総省が負担するコストは確実に減少している。だが前線に行った者にとっては戦争は終わらないのである。この先何年もその負の遺産をアメリカは背負っていかなければならない。

1 月のピューリサーチセンターの世論調査では、国民の関心事のトップにテロが、経済問題に取って代わった。オバマ大統領就任以来初めてのことである。国民が内向きになり内政重視の世論が強く 2012 年には８１％、外交を重視すべきと考えたのはわずか９％だった。それがいまでは内政重視は６７％まで下がり、外交に力を入れるべきだと考える国民は２０％にも激増した。アメリカの復活を予感させる世論だが、再びアメリカは世界に関与を強めるのか、そうであるならば「世界の警察官」から降りたオバマ大統領の国際協調主義と孤立主義はどこへ向かうのだろうか。残り 2 年の任期から目が離せない。